

式 辞

まもなく、桜が開花する知らせが届き、うららかな春の訪れを感じる季節となりました。

本日、練馬区立貫井中学校 第63回卒業式を挙行するにあたり、練馬区人事戦略担当部長様、練馬区議会議員様をはじめ、大勢の来賓の方々、並びに保護者の皆様のご臨席を賜りましたことに対し、卒業生、教職員とともに、謹んで御礼申し上げます

ただ今、卒業証書を授与された卒業生の皆さんご卒業おめでとうございます。凛とした態度で卒業証書を受け取る姿に中学校生活をやり遂げた満足感と新しい世界へ旅立つ強い決意を感じ取ることができます。また今日の卒業式にたどり着くことができたのは紛れもない皆さんの実行力の高さです。

さて、皆さんは、代々受け継いできた素晴らしい伝統に加え、皆さん自身が創り出した新しい伝統を、校内だけでなく保護者や地域の皆様にまで、発信しました。運動会では、生徒自身で、大人の力を借りずに、ゼロから創り上げ、学級の力を大ムカデや全員リレーで競い合い、最高のパフォーマンスを目指して努力する姿がありました。特に今年度の色別の応援演技は、卒業生のアイディアに溢れ、静と動の絶妙なバランスを見事に演じて、全校生徒だけでなく、応援席の保護者や地域の皆様の感動を誘いました。合唱コンクールでは、素晴らしいハーモニーを、練馬文化センターのホール全体に響かせました。美しい声と真剣なまなざしは、とにかく圧巻で、観客席は感極り、涙を流している方々がたくさんいらした光景は忘れることはできません。また、本校の新しい取組として、総合的な学習の時間における「横浜港クルーズ」や道徳科での「いじめ防止に向けたシンポジウム」などの探究学習、「お花美化プロジェクト」などの地域の方と連携したボランティア活動も、積極的にチャレンジしてくれましたね。そのような精力的な行動を、心から誇りに思います。そして、皆さんの活躍に心から感謝いたします。ありがとうございました。

卒業という節目にあたり、一つ、話をします。皆さんとは9月に修学旅行で京都を訪れ、2日目の夕刻には大江能楽堂で、観世流の能楽の体験学習を行いました。その観世流には、世阿弥という、今日まで受け継がれる能楽を確立した有名な役者がいます。そして世阿弥は、能楽の芸術性を伝承するためにいくつかの著書を残しますが、その一つの「花鏡」には、有名な言葉があります。

「初心忘るべからず」 この言葉の大半は、「初めて出会った時の新鮮な純な気持ちを忘れずに」という意味に用いられているようですが、伝えたい本当の意味は違うようです。世阿弥は、「人が、ものごとを初めて取り組むときには、間違えや下手さ、まずさが必ずある。その悪い状態の時の気持ちを、けして忘れてはならない。」と言っています。そして、「人は、自分の失敗や間違えをはっきりと見極め、注意が十分に行き渡らなかったことを自覚することによって、明日の進歩がある。」「この初心の積み重ねこそが、その先の無限の可能性へ広がり、つながっていく。」と教えてくれています。

私はこのことを知った時、いつでもどのような時でも、ものごとに臨む時にはおごり高ぶったり、油断する気持ちを戒め、謙虚に道を選び、邁進していくことが大切なのだと理解しました。最近、志はありながら壁にぶつかるとうすぐにあきらめてしまう人たちが増えているように感じます。あきらめてしまったらせっかくあなたの近くまで訪れているチャンスも逃してしまいます。皆さんには、これから長い人生が待っています。辛い壁にぶつかった時にこそ、世阿弥が伝えた「初心忘るべからず」をもって、努力を惜しまない人となり、壁を乗り越え、前進して行ってほしいと願っています。

結びとなりましたが、保護者の皆さま、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。立派に成長されたお子様の姿に15年間の子育てを振り返り、感激も一入のことと拝察いたします。義務教育の9年間で修了し青年へと大きく成長しました。青年期はこれまでとは違う悩みにも遭遇することがありますが、どうぞ温かい家庭の中で見守り励まし、時には叱り最も近くにいるよき理解者として支えてくださいますようお願いする次第です。また、これまで本校の教育活動へ常に温かいご厚情とご支援をありがとうございました。教職員共々厚く御礼申し上げます。最後にここにいる卒業生の皆さんが世界の一端を支えるべく、そして校歌に「次代の日本をつくる 新しき力、未来の力」とあるように前途洋々たる人生を楽しみながら歩いていくことを心から期待し、校長の式辞といたします。

令和8年3月19日

練馬区立貫井中学校 校長 佐藤 明子